

[特集]

地政学ルネサンスを超えて

—— 地理学と政治学の対話 ——

ラウンドテーブル～『現代地政学事典』(丸善、2020年)

パネリスト

高木 彰彦 (九州大学名誉教授・編集委員長)

山崎 孝史 (大阪市立大学・副編集委員長)

古川 浩司 (中京大学)

香川 雄一 (滋賀県立大学)

川久保 文紀 (中央学院大学)

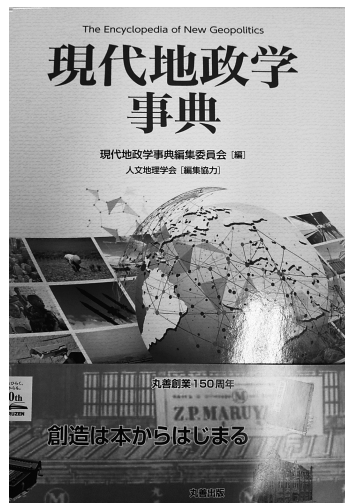
北川 真也 (三重大学)

モデレーター

岩下 明裕 (北海道大学・『境界研究』編集長)

本ラウンドテーブルは、『現代地政学事典』の刊行を記念し、2020年11月14日、大阪で開催された座談会の議論を再現したものです。座談会にはすべての編集委員が集まり、忌憚のないやりとりをしました。座談会の議論が、本事典の学界や社会における意義を問い直すものであり、同時に、地政学とは何かを今後考える際の一助になると考え、『境界研究』の特集として収録することにしました。議論のキーワードには、事典の該当頁数を示しました。ぜひ『現代地政学事典』をお手元にお楽しみください。

(岩下明裕) コロナ禍で厳しいおり、お集りいただきありがとうございます。『現代地政学事典』が丸善から「創業150周年記念」として出版されて10カ月たちました。今日は事典の編集委員と丸善の編集部の方にお集りいただきました。事典の編纂というのはとても大きな仕事ですが、その生みの苦しみと刊行された後の反響などを踏まえて、今日はみなさん



に地政学について存分に議論していただければと思います。こういう状況ですので、北川さんと古川さんはオンラインの出席となり、議論の仕方に工夫がいるかと思いますが、まずは対面で参加いただいた方々を軸に議論し、これを踏まえてお二人にはコメントをいただくかたちで進められればと考えています。さてこの事典ですが、普通、事典というのは、関心のある項目を引いたり、ランダムに目を通す方が多いように思います。ですが、この事典に関しては、調べるためという使い方もあるのですが、むしろ「読むための事典」ではないかとも受け止めています。その理由ですが、編集委員のなかでも特に北川さんが担当した部分がそうだと思うのですが、私たちから見ても、知らない、聞いたこともない項目がたくさん含まれています。知らない項目というのを読み手は引くことができませんから、やはりこの事典は読んで学ぶという側面が強いのだと考えます。読んでみて、あ、こういう議論があるのか、という感じです。実は今回、私もこの座談会を準備するに当たり、一回ざっと全体に目を通す、二回目はそれなりに前から読む。もう一回、三回目はランダムに読みながら構成を再検討するというアプローチをとりました。そして結論を言えば、手前味噌を承知ですが、読み物としてなかなか面白く、画期的な事典になっていると再確認しました。

そう言えるのも、私自身がこの事典づくりに、副編集委員長という立場でありながら、コミットメントがもっとも薄い一人、地政学そのものについてももっとも冷ややかな立場であったからだと思います。個人的には主としてボーダースタディーズ(事典、第5章)の部分には責任をもつけど(と言っても、川久保さんと古川さんに多くをおまかせしていたというのが実際ですが)、そのほかは見守るという姿勢をとっていました。今回、事典についての座談会を提案し、また進行も含めてコメント役を積極的にお引き受けしたのも、事典づくりへの関与の少なさの反省と、それゆえに本事典の意義について一番、引き出せる立場にあるのではないかと考えたからです。おかげさまで本事典を読んで、地政学についてかなり真剣に考えるようになりました。地政学ってこんなに深く広がりがあるって、盛りだくさんの議論があるのだなと学んだのは、おそらく私だけではない。これを手に取った人の多くはそうではないかと想像します。その意味で本事典の誕生はとてもインパクトがあり、類書もない。こういうスケールの本はこれからも簡単には出ないでしょうから、画期的であると思うのです。

空想の地政学

(岩下)さて半分は本音ですが、外交的な儀礼はこの程度にして、切り込んでいきたいと思います。本書の刊行に前後して、二冊の本が出ました。北岡伸一、細谷雄一編の『新しい地政学』(東洋経済新報社)と庄司潤一郎、石津朋之編『地政学原論』(日本経済新聞出版)がそれです。前者は「日本を代表する知性を結集!」ともものものしく、後者は防衛研究という際立ったコミュニティの作品で、この座談会でこの二冊に触れないわけにはいきません。この二冊についての詳しい議論は後に回しますが、私たちの事典も併せて読んでみて思ったことは、忌憚なく言えば、古典的、つまりクラシックな地政学というのはSF、サイエンス・フィクションであると。もう少しはつきり言えば、科学のふりをしたフィクションであると。これに対して、クリティカルな地政学、つまり批判地政学とは何か。これもやはりSFである。ただし、こちらはスペキュレーション・フィクション、つまり思弁的なフィクションであると。これについては座談会を通じて、おいおい説明していきますので、いまはこの表現だけ覚えておいてください。

で、『新しい地政学』と『地政学原論』は、両方とも一種の「童話」だと思いました。特に『原論』はそう。こういうことを言うと、たぶん、二冊の筆者たちに総攻撃されると思うのですが(笑)、これは子供に対して読み聞かせする話、おとぎ話です。マッキンダー(事典、258頁)、マハン(事典、256頁)とか、スパイクマン(事典、260頁)とか、これぐらいです。なんでこういう人たちの話をもとに現代を読み解こうとするのかな、それがまずわからない。もちろん、彼らのことは私たちの事典にもたくさん何度も出てくるので同じムジナと言われるかもしれない。ただ事典の方はこれを乗り越えようとするつくりになっています。でもこの二冊はむしろ、この先人たちを先駆者として「再発見」することで世界を語ろうとしている。でも彼らが見たこと、考えたことというのはいまの世界と違いすぎるわけで、彼らの主張をああだこうだ整理して、この解釈が正しく、これで現在の世界がわかって本当でしょうかとまず疑いたくなる。

そう直感する最大の根拠は、ユーラシアです。結局、みなユーラシアを気にされるわけですね、先人たちは。でも私、ユーラシアを標ぼうしている研究所のセンターにいるわけです。そこからみるとこの先人たちのユーラシアはすべて空想ですよ。うちの事典でマッキンダーの項目見てみましょうか。「ハートランド理論」(事典、272頁)の説明のところに地図がありますね。

この地図を見ていて、ほとんど旧ソ連ですよ。中央アジアとコーカサスがちょっと入っていて、これをユーラシアの中のピボットエリアと言う。でもこの人たちにとって、シベリアとか極東はたぶんないのです、頭の中に。これは現実の地図ではない、フィクションでしょう。だからハートランド理論、みたいなもの、ユーラシアを制したら世界を制るとか、それがハートランドであれリムランド(事典、274頁)であれ、何の意味があるの

か？ 彼らにとってユーラシアは対象でしかない、いやきつと「処女地」なのでしょう。つまり、彼らの空想を紹介しつつ、彼らの時代性の限界とか、我々の誤解が多いからと注釈してみても、本当に建設的なのでしょう。この点は私たちの事典にもあてはまるところで、自戒を込めて問題提起します。そして言うだけならまだしもそれを無理やり、政策と結びつけて、政策作っている人たちもこの地政学の先人たちの影響を受けている(かもしれない)と展開されても、そもそも実証にも何もなっていないと思うのですが。

(川久保文紀)「封じ込め政策」(事典、278頁)というのは確かに地政学的にみえるけど、ケナンと地政学の関係も微妙ですね。ケナンにとってはイデオロギーがより大事だったのではないのでしょうか。そしてソ連や中国の軍事的脅威を意識しながら、核軍拡路線を主張し、古典的な地政学とは一線を画していたとみるのが普通でしょう。モーゲンソー(事典、245頁)にいたっては、古典的リアリズムではあるけど、地政学には批判的ですよ。モーゲンソーのなかに地政学を見出そうとするのは自由ですが、やはりこれも童話かもしれない。彼は、地理は固定されているが人や資本は移動する。空間にも移動するものもあり、地理と空間のずれは結局、解消できないという理由で地政学を批判します。だから彼自身、地政学者などと名乗ったことはたぶんない。

(岩下)そういう意味では事典は、今はやりのいわゆる「地政学」の言説に対する一種の解毒剤にはなっています。ただそれでもクラシックな部分、伝統的地政学の章は先人たちに引きずられすぎる。地政学を論じるのに、ハウスホーファーやら、マッキンダー、マハンといった名前を出さないと議論できないというところは、私たちの事典も先の二冊の本と同じ罠に落ちているのではないですか？ もうちょっと他にやりようがあったのではないのでしょうか？



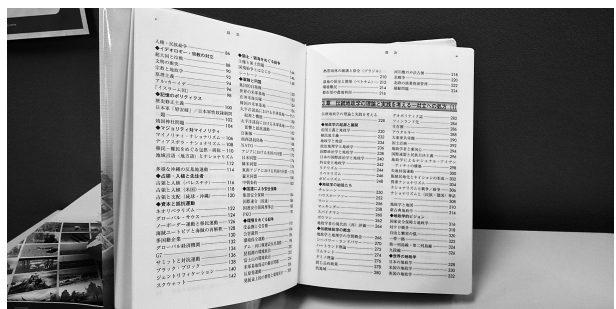
(高木彰彦)それを罠と言われれば否定できないのは確かです。ただ『地政学原論』の著者たちが古典的な地政学を繰り返し強調するのは、要は地理的条件が不変であり、それが絶対的な影響力を持つかのような見方ですよ。それは昔からそうです。戦前の地政学を必要

とした人たちは、そうした地理的条件の重要性を主張したわけです。これに対して、ボウマン(事典、262頁)のような連合国側の地理学者たちは、地理的条件は確かに変わらないが、その意味は時代によって変わると言ってきたと思います。そして、ドイツの地政学者はこれを理解していないと批判したわけです。

(岩下) どうしてみなユーラシアにこだわるのですか。米国の人たちはなぜ自分たちの地域の地政学を語らないのですか？ ヨーロッパの人はアフリカ、中東も触れるけど、やはりユーラシアを勝手に論議したがるのかが、謎なのですが。

(高木) マッキンダーはユーラシアだけでなくアフリカも含めて「世界島」と言っています。ユーラシアを議論するのは主に米国の人たちです。彼らにとって南北アメリカは裏庭のようなものですから、世界的な戦略となると世界島ないしはユーラシアが対象になる。そもそも英米には地政学という概念は本来なかった。マッキンダーもユーラシアに対してハートランドなどのタームを使いましたが、最後まで自分のことを地政学者とは言いませんでした。マッキンダーは1943年の論文の中で、「ドイツ人の心から黒魔術を取り払うには、決壊することのないパワーによる堤防を築いて、対立する哲学を洗浄することが必要だ」(事典、259頁)と言っているくらいですから、ドイツ地政学に与することなど考えられません。ところが地政学が第二次世界大戦中に米国でもブームになってしまった。とくにドイツから亡命してきた学者たちがドイツでの地政学流行を吹聴したため地政学がやりだした。その背景には、「戦意高揚」のための対ドイツ・プロパガンダとしてハウスホーファーを主人公とした映画が上映されたことがある。地政学が米国ではやったのはこうした戦争が後景にあります。

その後、米国の地政学はスパイクマンがベースになって発展します。でもスパイクマンはマッキンダーに従ったわけではなくて、リムランドという概念をもとに米国がシーパワーとしてここに介入することで、ランドパワーと対抗すべきと主張したわけです(事典、270頁)。スパイクマンが「封じ込める」という言葉を使っていないことは確認してませんが、これが戦後アメリカの対外政策の基調になっていったのではないかとするのが、いわゆる地政学者の解釈だと思います。これがケナンと直接つながるかどうかはもちろん別ですが。



(岩下)率直な疑問は、そういうのは大きな話、いわゆる覇権争いとか、グレートウォー的なスケールではないですか。ですが、例えば、米国の建国史を考えたら、自身の地政学が、言説になっていなくても、そもそもあったのではないかという点です。米国は東を起点とし、フランスやメキシコと戦争し領土を広げて、太平洋や南へと膨張したわけですから。本人たちが自ら地政学と名乗ってなくても、そういうものの見方を「地政学」として整理するのが本来の学問としての姿勢だと思うのですが。私の不満は、地政学をめぐる議論が一種の「童話」をめぐる奇譚の再生産をやっているだけではないかというところにあるのです。手垢の付いた有名人の話ばかりを繰り返すのは、地政学がやはりSFに過ぎないということではないでしょうか？

(高木)そういう話はもう少し後の時代に形成されたのではないですか。地政学や、マッキンダーとかスパイクマンが再認識されるようになるのは、実は戦後直後ではありません。キッシンジャーがジオポリティカルという言葉で乱発した1970年代以降のことだと思います。で地政学という言葉がブームになり、元をたどったら、マッキンダー、スパイクマン、シーパワー、ランドパワー論につながり、英米起源の地政学が発見された。そういう意味では今、起こっていることも「再発見」ですがね。

もう少し詳しく言うと、もともとドイツのハウスホーファーあたりが地政学を「発明」したのですが、彼が英語圏にも地政学的な研究をやっている人がいて、それがマッキンダーやマハんだと評価したわけです。こうした見解が大戦中に英米に逆輸入され、彼らが地政学の祖として位置付けられた。しかしこれがいったん、戦後は途絶えるのです。地政学はナチスの政策と結びついたからと抹殺された。それが復活して定着するのがキッシンジャーなんかの動きがあって80年前後、そのときにカギになったのがスパイクマンです。

スパイクマンは米国の対外政策をモンロー主義と絡め、米国のこれまでの対外政策は孤立主義と介入主義を繰り返してきたと指摘しました。しかし最終的に米国はシーパワーとして国際社会に、要するに外向きになって海外に積極的に介入すべきだと主張したわけです。彼の著作は第二次世界大戦中に書かれたのですが、当時敵国だった日本も戦後はシーパワーに取り込み、ランドパワー、つまり中国およびソ連に対抗すべきだと主張した(事典、261頁)。この考えが米国の戦後の世界への介入政策に引き継がれていったのではないかという見方です。

(川久保)そこが分からないのです。国際政治学会とか、アメリカ外交の研究会とかでスパイクマンの名前などほとんど出てこないのです。『政治学事典』や『国際政治事典』など弘文堂から出ているけど、スパイクマンは名前が出る程度であり、地政学の戦略論としては扱われていないような気がします。

(岩下)だから、国際政治学とか外交研究をしている側から見ると、なぜこんなのにこだわって国際政治を語ろうとするのかという問題意識がわからないのです。例えば、私たちの事典でも第一次安倍政権の「自由と繁栄の弧」(事典、320頁)が出てくるでしょう。私はこれが生まれてきた背景を多少なりとも知っていますが、これを地政学として素晴らしいなどと読み込みすぎるのは実際の外交実務者の議論を知らない空想です。それに彼らがなぜ「価値論」をここに入れたのかも分析できない。要するに外務官僚の数名が、当時の外交を格好よくアピールするために作った造語に過ぎません。昨今の安倍政権の「地球儀を俯瞰する外交」も同じです。こういうのを学者が戦略的だとか地政学的だとか大きくいうと、外務省の方は笑います。地政学を論じる人たちはもう少し政策に近い人たちの議論を追っかけられた方がいいと思います。

批判地政学について

(山崎孝史)この事典で柱となるのは、批判地政学(事典、400頁)の章です。そう考えるとそれが何を批判しているのかという部分が不可欠です。実際には、古典地政学を批判する人たちもまた古典地政学をそれほどには通読してないのです。そこで全体の構成を考えると、古典地政学についても検証的な取り組みが不可欠だと思うのです。いわば起承転結の一つの、転の前の段階としてこれが必要なので入れたと言えます。古典地政学が実際の外交政策にそれほど重要な議論ではないというのは、私たちにとってもう常識でもあるので、おっしゃるように、そんなに入れ込まずに古典地政学をまとめればいいのですが、書き手にはやはりずっとこれを勉強してきて、思い入れもあるので、そう淡泊にはなれなかったのかなと受け止めます。

(高木)大事なことは先人たちの議論をどうきちんと踏まえるかも含めた概念の定義だと思います。そういう意味で事典の方は精緻に対応できたと考えます。実際、『地政学原論』には私たちの事典での整理や、一部執筆者の存在など大きな影響を与えているかと。「ハウスホーファー」(事典、252頁)、「汎地域」(事典、280頁)などを執筆したクリスティアン・シュパンクさんは『地政学原論』にも執筆されていますが、同時進行というよりは、事典の方が先でしたね。そういう意味では事典が他の地政学に関する書籍にインパクトがあったというのは大きいと思います。



(岩下)『原論』の執筆者は高木さんと山崎さんをかなりリスペクトしていますよね(笑)。そこで彼らの批判地政学への批判点について伺います。批判地政学に対する彼らの批判を一言で言うと、要するに党派性が強すぎるのではないかと。「お前ら、左翼か」と。そして、自分たちは正しいと言いながら、自分たちに対する批判が足りないじゃないか。ジョン・アグニューとかクラウス・ドッズを例示して言うわけです。前者は最初から国家が悪いと決めつけすぎ、後者は米国大統領選挙で民主党のジョン・ケリー候補を応援するなど政治的過ぎるとか(原論、61-62頁)。あまり分量が『原論』のなかで占めているわけではなく、一言いっておきたいという程度にも聞こえますが、これは私たちのなかでもっともクリティカルな立場の北川さんに訊きましょう。党派性が強くて何が悪いとかとか、ジョー・バイデンを応援してどこが悪いのか、といった反論になりますか。まあ、バイデンが勝っても米国がどこまで変わるかは別でしょうが。

(北川真也)批判地政学とひとことで言っても、系譜をさかのぼっていくなら、一つではないと思うので、そこをおさえて議論していく必要はあるかなと思います。ただ少なくとも共通するのは、地政学の自国中心というか、国家の統治者の目線に立たずに、地政学をもっと広げていくことであるとは言えるでしょうか。これまでの地政学では見えない現実、見逃してしまう現実がある。それは単に「いろんな現実があるね」ではなくて、こうした地政学の支配や暴力を真に受ける地域の人たちからすれば、ないほうがいい、壊してしまった方がいい現実もあるでしょう。地政学とは、この意味で争われる現実なのだと思います。こうした事柄を、真剣に考えるということが出発点になると思います。

例えば、現在の国家をどう考えるか。国家自体が様々で国家間にもむき出しの序列があるとはいえ、とにかく国家を中心に物事を見ていったときに、やはり見えない現実がある。世の中には、国家よりももっと「下」で起こっていること、「上」で起こっていることがあります。しかも、そうした変化によって国家のありようもまた変容している。国家がこうした力学から逃れていたり、無縁であるわけではないですよ。新自由主義やグローバル化のなかで国家自体、国家と領土、国家と人々の間の関係も大幅に変更されている。もう今の国家は、地政学が前提としてきた国家ではないわけです。あと、近代を振り返っても、たくさんの変動に満ちてきたはずですよ。国外への戦争、植民地支配、領土争いなどもそうですが、国内を行政空間、統治空間として構成していくプロセス、時間やミクロな空間のコントロール。より喫緊の課題としても、ジオポリティックスの「ジオ(地)」の再検討にかかわると思いますが、資本の生物圏、地球への侵食などなど。国家だけ単体として見ても見えない現実、さらにもう国家だけで世界をとらえても何も対応できないようなさまざまな現実、多様で争われる地理的現実を観ましょう。個人的には、少なくともこれが目下の批判地政学に共通する部分ではないかなと思っています。

(岩下)批判地政学もいろいろ、それはおっしゃる通りだけど、批判地政学の在り方を批判しなければならない。とするとその政治性も批判する、自らをどこまでも批判する。これは最後はアナキズムになるし、そうでなければニヒリズムに陥りませんか。

(北川)いや、アナキズムでもいいと思いますが。

(一同)なるほど。



(北川)批判地政学が、当初、英語圏の「ポスト構造主義」受容というか、「フレンチ・セオリー」と称された理論に影響を受けた理論志向の強い運動だったことは確かです。だから、ときに現実から乖離した知的運動として揶揄されますよね。でも、地政学のようなハードな議論に、こうした理論を用いて批判的作業を行い、地政学をもっと広い理論的また歴史的な枠組みのなかで提示したことは相当に大事なことだったと思います。とはいえぼくは、批判地政学もまた現実の政治的な争いを背景として生まれてきた概念や理論、態度を引き継いでいると考えます。それはこうした研究の流れが、どのような文脈を経由してかたちになってきたかを考えるとよりよくみえるかもしれません。そうすると、やっぱり不平等な現実世界に対する反発、この文脈抜きにはあり得ないんですね。ベトナム戦争における抵抗・反戦をはじめとする反帝国主義や反植民地主義、米国の公民権運動、ブラックパワー、フェミニズム運動、そして反資本主義もそうです。「1968年」の世界的闘争とでも言えるでしょうか。そういう動きの中から、学術研究のレベルでも批判的な議論が生まれてきた。批判地政学もさかのぼれば、そう呼ばれないとはいえ、マルクス主義地理学に依拠した、ピーター・テイラー（事典、237頁）に代表される世界システム論の地政学があるわけですから。こうした来歴を考慮せずに、批判地政学とは何かみたいな話をするとうまくないと思います。

そういう意味で、古典地政学に近い立場から、同じ指摘じゃないですけど、批判地政学自体に政治性や「党派性」があるという指摘は、ある意味では、あたっていますよね。国家や権力に対する異議申し立ての文脈に根ざしてきた、少なくとも、それを背景としてきた

ものですから。これを左翼的と言われればそうです。ただ左翼的と言っても、そこにはアナキズム的立場からマルクス主義、フーコー流の権力論などいろいろあります。地政学だけではなく、オトゥーホールの研究に象徴される批判地政学も、このように広げて考えてもよいと思います。

岩下さんが言うような、批判地政学の研究がニヒリズム的になるという話も、知のレベルでの批判に寄りすぎということでしょうか。現実から遊離した解体的批判のイメージが強すぎるというところなのでしょうか。私としては、日常生活の中に議論を広げていきたい、人々が暮らす場所で、さらには地政的な力学と遭遇、衝突するところで、人々の身体とか、主体形成とか、生とか、欲望というものを探りたいという気持ちが強いです。批判地政学の流れを汲む研究も、こうした方向に進んでいるとも言えますし。大上段にならないかたちで地政学を論じられればと思うのですが。

「地政学ルネサンス」を超えて

(岩下)では冒頭で紹介した、『新しい地政学』と『地政学原論』との相互対照により踏み込みたいと思います。『現代思想』でも「いまなぜ地政学か」という特集号(2017年9月号)が組まれる、それから奥山真司さんの一連の地政学がらみの一般書もあり、いまちょっとブームになっています。地政学という言葉は、私も含めてあまり深く考えないまま使われてきました。わかったかのような雰囲気です。「地政学的に大事」だとか「大事でない」と普通の研究論文でもよく書かれています。いわば一種の「地政学ルネサンス」ともいえる状況が日本にはあります。他方で、この地政学はほとんどクラシックな地政学、もしくはその焼き直し域をでていない、クリティカルな批判地政学はあまり言及されない。もちろん、濃淡はありますが、ある種、そういう状況を反映したのが、まさにこの二冊であるわけです。で、『原論』の方からいきましょうか。

『原論』の25頁に、地政学の定義の多様乱立について警鐘が鳴らしてあります。本事典への言及では、「日本を取り巻く国際情勢に対する危機感と、地政学の在り方を問題意識としていることから、しかも執筆者と制度が多岐に及んでいて、地政学のあいまいさと政治化を及ぼしている」と批判されています。ただこの事典への評価、特に「日本を取り巻く国際情勢に対する危機感」というのは、一部そういうところはあるけど、事典はむしろ地球社会全体、つまり地球的問題群の詳細としてこれを取り上げているはずで、この批判はあたっていいのかと思うのですが、いかがでしょう。

(山崎)私は鍵となる概念や用語の整理を担当しましたが、先ほども議論に出た通り、地政学はいつも国家中心主義にはまり込むのです。従って、日本に対する云々はむしろ評者の問題意識の結果ではないでしょうか。私はグローバルな視野で議論を落とし込みたく、む

しろ国際的な執筆陣を用意したのもそれが理由です。むしろ日本の読者から、なぜこれらが「危機」の最初に来るのかと違和感をもたれるのではないかと気にしていました。国家中心主義で構想される古典地政学をどう認識論的に超えていくかという作りを重視した立場からみれば、このような(自国中心の)理解の仕方こそが問題なのだとは切り返したいところです。

(岩下)そこで地政学とは何かが問題になっていくと思うのですが、地政学とは何なのかよく分からない、少しはつきりさせたい、というのもこの事典を作る一つの動機だったと覚えています。しかし、事典を読んで地政学が分かったかということ、読めば読むほどわからないというところもあるように思います。要するに、この事典でいう地政学の定義が広すぎる、もしくははつきりしないというのが批判の柱の一つにあると考えます。一応、事典による定義が「刊行に当たって」にあります。「地球社会を閉じた政治システムと考え、そこで生じる諸問題を、国境や事件、人や物の流れ、領土やアイデンティティなどに焦点を当てて、様々なスケールで考察する」(事典、i頁)。これはたぶん、一般の読者がイメージする地政学とは違うように思いますが、いかがでしょうか。

「地球社会を閉じた政治システム」とすると、これは地理的には一番大きなスケールと位置付けられます。そこからスケールをもろもろ変えることでさまざまな議論をするということになるのですが、地球社会全体のシステムをスケールするなんていうのは、スケールフリー、実際にはスケールを考えない議論になってしまい、そもそも地政学にはならない。言いたいことは、事典の項目の中でも、スケールを強く意識しているものとまったく意識していない項目が目につきます。まったくスケールを意識しない項目を地政学として論じるとわけがわからなくなりませんか。

(高木)すべてのスケールに共通するトピックスというのはあるでしょう。それがスケールフリーではないですか。

(岩下)いえ、私が訊きたいのは、スケールフリーの議論は地政学とそもそも言えるのか、という点です。とくに何かイズムの位置づけは難しいでしょう。リアリズムは地政学となじむとしても、リベラリズム、ネオリベラリズム、コンストラクティビズム、大きな言葉でもナショナリズムなど取り上げるときは、スケールフリーで記述したらだめではないですか。何らかの空間性と結び付けて書かないと地政学にならない。だからスケールがフリーであっても、そのスケールの意味をおさえて執筆しないと地政学にならないと言いたいのです。空間と結び付いて、さまざまなナショナリズムの発現形態があることや占領と入植／支配みたいなことを山崎さんが軸になって項目を作られました(事典、106-121頁)。

これは素晴らしい試みだったと思います。でも他の項目ではこういうものが機能していないところも少なくない。冒頭で出たケナンの例で言うと、こちらはスケールにとらわれすぎて、イデオロギーや価値を捨象しすぎている。つまり、コミュニズムにせよ、宗教にせよ、これらに対峙するときの地政学については、やはりスケールがフリーなものそれが空間に限定されるせめぎあい描かれなと地政学とはいえないのではないかと思うのです。

(高木)私がスケールフリーと言ったのは、あるトピックスが、ローカルのスケールでも、グローバルなスケールでも語られるという意味です。岩下さんがおっしゃったナショナリズムでも、国家を軸にして語られることが多いでしょう。そうではないところを描きたかったわけです。国家を軸とする、地域を枠組にする。つまり、国境を越えるヒトやモノの移動の問題は国家により決定されるが、移動の影響は地域レベルに及ぶということです。そういったことを意識して書くのは大事だと私も思います。ネオリベラリズムでも、これはラテンアメリカの開発独裁による格差拡大と関係があるように、それがあ地域と親和性があり広がっていくといった叙述でスケールの重層性がわかると読者にはもっと伝わるでしょう。

(山崎)地政学をどういスケールのものとして考えるかは、様々な軸が必要でしょう。やはり国家、そして国家を超えるもの、国家の下位に包摂されるもの、そして国家をすりぬけるもの、多層的です。問題は地政学がジオポリティクスと言われたとき、これは本当にポリティクスなのかということです。ここでいうジオポリティクスはいろいろなスケールで起こる空間や領域の管理、そして支配をめぐる実践を指す言葉を意味するのだと思います。例えば、コロナの感染症問題でこの議論をやりました。コロナ問題はバイオポリティクスであり、感染症抑制のためのいろいろな公衆衛生計画と結びつきます。そこでは、介入を前提とする行動制御といった空間管理と自由の確保のせめぎあいになる。つまり、これはジオグラフィーに対する一つのポリティクスのかたちを意味します。国家は重要だけど、国家にとらわれるとみえない空間と政治がここにある。ですから、私たちはもう地政学などといういい方は止めよう、これを「地政治(geo-politics)」(事典、401頁)と呼ぼうと提唱しています。そして大文字の地政治は、極めて多様な小文字の地政治と地政治の絡み合いのなかで動いていく。

私たちの多くは、ジオポリティクスを旧来、地政学というかたちでまとめ、国際政治のようなハイポリティクスでしか論じてこなかったわけです。でも先ほど岩下さんも問題提起された米国における語られない「地政学」、言い換えれば、スケールの「小さい」(これは重要ではないという意味ではなく、むしろ逆でスケールの小さいものが大きなものを支配

する場合もあると考えるべき)地政治がある。私たちはそれを見逃してきたけど、それも伝統的な意味での地政学であったかもしれない。地政治という概念はそういうものも拾い出せると考えますね。

ですから、地政学という概念によって縛られる枠組みからどれだけ自由になって、私たちがジオポリティクスを社会現象に適用していくかが大事であり、これはあらゆるレベルで可能だと思います。英米の政治地理学者が考えたのはまさにこれなのです。古典地政学を批判し「新しい地政学」を立てるときはそうだった。僕はこれを米国で勉強してきました。それがテイラーのマルチスケール論(事典、374頁)、アグニューの領土の畧論(事典、524頁)です。事典ではこの認識論的な脱構築のプロセスを描いたつもりですが、項目だけ見た人はどうしても古典的なイメージに引っ張られますね。ですから、この事典はやはり読んでほしいと私も思います。ただ事典なので何百人も書くとこの(認識論的)統一は難しいですね。

(香川雄一)社会現象や地政治についての議論は私が担当した環境問題でも重要だと思います。これまでの議論を伺っていて感じたのは、旧来の発想の問題は、地政学とは国家のみを前提とした学問だったということです。こういう主張をどこからか引っ張ってきて、これを出発点に置き、それで本の構成をすべて組み立ててしまうところに隘路があるのではないのでしょうか。基本的に古典的な地理学というのは国策ですよ。そういう意味では、昨今の地政学の書籍はそういう話の延長で、それを担う(担いたい)方々が発信しているものだと思います。でも私たちの地理学の世界では「マルチスケール地政学」というのはもう当たり前の議論なのです。国家や国策という発想では、政治的には二項対立に陥りません。でも現実社会はそうではない。その当たり前の議論があまりに論じられてこないもどかしさがあります。この事典はそういう手がかりを与えてくれるのではないのでしょうか。

環境問題を地政学と名のつく事典でこれだけ論じたというのは画期的です。これこそ「新しい」にふさわしいものだと思います。なぜなら環境問題こそ、二項対立では解けない、ゼロサムではない、様々なステークホルダーがからみ、マルチスケールで考える問いだからです。ナショナルなレベルでの議論はシンプルに表出しがちですが、環境問題はローカルなスケールで差が出ます。同じ空間でも被害者は特定の層や業種に集中したり、そうでなければ無関心だったりする。きめ細かい作業と分析が必要です。このような地政学は一般の方になじみはきつとなかったでしょう。環境政策を考えておられる方々は、環境史や地理学的な研究も見てくださってきているように思います。この事典で示されたような視座が今後は研究として増えていけば嬉しく思います。

ネオクラシックな地政学は必要ないのか

(古川浩司)スパイクマンやマハンが繰り返し出て来るのは、国際関係論で(覇権国と新興国が折り合えないまま戦争に至ってしまう現象をアテネとスパルタの関係から演繹した)「トゥキディデスの罫」が今でも必ず語られるのと似ていますね。学問的な体裁を整えようとするとき安易なやり方として、「昔からそうだった」「人間はあまり変わらない」といった前提に依拠しようとする傾向があるからかもしれません。例えば、地政学でも隣国とはそもそも仲が悪いものとかそういったステレオタイプから始まります。学問的ではない話ですが、地政学では昔からそう言われているとかいって、スパイクマンの名前を入れると説得的に思われますので、権威づけみたいなのこともあるのでしょうか。

国際関係論を研究している者として言えば、地理学と政治学のアプローチは違いますが、なぜ政治学者が地政学に魅かれるのかと言うと、例えば「膨張主義」をどう理解するかというときに手がかりになるからかもしれません。実際、大戦後にソ連がどんどん膨張していくのを見て(少なくともそう見える)理由を考えると、地政学で取り上げられていることを理由にすると一見、わかったような気になるのではないのでしょうか。

さきほどから批判地政学の話が出ていますが、ポイントはクリティカルに依拠して古典地政学を批判しなくても古典地政学の説明の不十分さを別の古典的な理由で批判できることであり、国際政治学もそのように発展してきたのではないのでしょうか。



(岩下)クラシックな話はクラシックの観点から見直せる。ネオクラシックな地政学ですかね。

(山崎)この点はその通りです。先ほど言及した「新しい地政学」、誤解されないように補足しますが、これは例の本のタイトルではなく、学界で批判地政学が確立する前に現れた国際政治地理学のアプローチの総称、いわゆる New Geopolitics のことですが、これは何も批判地政学だけを目指したわけではない。最初から批判しようとしたのではなく、実証的な立場から古典的な地政学を乗り越えて「新しさ」を見出そうとしたと言えます。その中には、日米のODAの拡散や使われ方を日米のジオポリティクスの中で議論する研究もある。

クリティカルに走る前に、国際関係をきちんと実証的に空間から吟味するというアプローチの重要性は、私の師匠のジョン・オロッコリン(事典、229頁)も主張してきたことですし、(批判的言説分析ではなく)空間分析をやるという意味はそういうことです。ネオクラシカルな地政学についてはきちんと論じなければならないと私も思います。軍事的なオペレーションの研究などはここに位置すると考えます。

(川久保)山崎さんがおっしゃることは大事で、「新しい地政学」と批判地政学は分けるべきでしょう。『新しい地政学』の「新しさ」は、細谷さんが書いていますが、グローバル化時代の地政学が「新しい」、つまり陸・海・空に加えて、宇宙とサイバーを入れること、さらに科学技術といった、必ずしも軍事中心主義とは言えない要素を加えたこと、まさにネオクラシカルです。ただやはりそれらだけでは足りないとも思います。アグニューを引っ張り出すまでもなく、単純化された世界の見方を少し変えろとか、反覇権主義、いわゆる覇権に対するアンチテーゼの地政学とか、言説を使った分析とか大事だと思いますので。とくに政治家の発言、マスメディアに加え、SNSなどの影響も重要でしょう。そこが欲しいところです。

そういう意味では、事典の方でも「新しい」のはいったい何かということをもう少し明示してもよかったですように感じます。それから批判地政学の「批判」の意味ですけど、伝統地政学とか古典的地政学に対する批判、という意味もあるのでしょうが、『平和研究』の「批判的安全保障論」に関する特集論文のなかで、土佐弘之さんがおっしゃっていることでもあります。危機回避へのコミットメントが批判の本旨だという議論も忘れてはならないでしょう。要するに、いろいろなリスクが今、分散し地球社会が危機に陥っている状況でこれを回避するための考え方を提示するのが批判(クリティカル)、批判理論だと。そういう意味では、事典の第1章が「危機」、私たちは何におびえるのか、というのはよかったですと思います。

(山崎)これは批判地政学の考え方、リスクへの対応を意識したものです。環境を考える際、リスクという考え方をしますよね。ではどうリスク管理できるのかという問いになります。今の国際関係、国家管理システムのなかでこれをどうするのかという議論の立て方です。

(高木)批判地政学について付け加えると、オトゥホール(事典、403頁)やアグニューによる初期の批判地政学は、大統領の演説やケナンの「長電報」などを言説分析によって読み解くという、文学で言うテキスト・クリティック、つまり批判というより批評という意味合いが強かったようにも思います。

(岩下)『新しい地政学』に戻りたいのですが、細谷さんはサイバーと宇宙を入れてますよね。これはネオクラシックのひとつのあり方です。ただ欠点は、そう言っているのに本論のなかであまり展開されていないということです。それがもっとあればよかったと率直に思います。たぶん執筆陣が最初から決まっていたのかな。

(北川)少し話が戻りますが、ネオクラシックと言ったとしても、それを議論するとき、歴史的な地政学の話に戻り伝統的な古典地政学の議論に依拠してしまうという傾向がやはり問題なのかなと思います。新しいクラシックなのだから、そこに一貫性はあると言えばあるのでしょうか。ただ批判地政学的には、「地政学」というかつての知を可能とした社会的、政治的、技術的な条件からそれだけ切り取って論じることはできないとは言えるでしょう。国家自体も、グローバル世界も、地球も変容しているし。そうした条件が大幅に変わっているなかで、かつての地政学に立脚してしまうと、それでは扱えない地政的な部分をどのように見出すのかという問題意識はなかなか生まれないかなと思います。

(岩下)私はもともと領土問題、国境問題から入ったものですから、どちらかと言えば物理的かつ実証的なハードなことを扱う研究者です。そういう意味では、ネオクラシックのスクールに近いと自覚しています。クリティカルな議論を好む方はコンストラクティビズムに依拠する方が欧米でも多いのですが、ネオクラシックな立場から、紛争に対する彼らの見方によく疑問をぶつけています。

実はいわゆるポストモダニズムと地政学は相性が悪いと思うのです。ポストモダニズムは地政学そのものを疑うでしょう。フラットな社会、ボーダーレス、脱空間を強調したり。でもそこからもう一回つくり直そうとするとプレモダンに戻ってしまいかねないから、結局、クラシックとかネオクラシックの隘路に落ち込んでしまわないかと思うのです。一言で言えば、ポストモダンの地政学でプレモダンな現実と向き合ってしまう。地政学を疑う、それで再構築すると元に戻るといった循環がありませんか。

空間の意味を問い直す、だけど空間性も否定しないという観点をもっと考えないと、ネオクラシックを相対化できないのじゃないかな。さらに身体性とポストモダンをどう考えるかと。ポストモダンにどこまで身体性があるんだろうかと。結局そうすると物理的な問題がある。つまり、人の生存とかに戻っちゃうわけですよ。そうするとこれはネオクラシックでしょう。だから事典の項目でいえば、「戦争と性暴力」(492頁)、「女性兵士」(494頁)、「子ども兵」(496頁)というのが出てくる。これはクラシックでしょう。

ボーダースタディーズのコミュニティを見ても、コンストラクティビズムは欧州でも強いですが、ロシアのクリミア併合問題に無力でした。結局、現実が起こっていることに対して無力です。やったもの勝ちに対抗するには、こちらマッコになる。「悪循環」です

が、どうしたらいいのでしょうか。答えが見えません。北川さんは、国はマッチョだと言うのですが、国と闘う相手はマッチョにならざるをえない、物理的にも。そうすると、反対派が勝っても、結局は国と似たような構造が生まれる。どう超えますか？

事典の5章はボーダーですが、ここもプレモダンとポストモダンが並列しています。項目として並列化してしまうとアクセントが見えなくなりますね。他の章にも通底する問題です。対照的に6章の方、実証というかポジティブイズムが多くみられます。そうすると結局、私たちもネオクラシックの仲間なので、『新しい地政学』や『原論』をそう批判できないように思うのです。北川さん、何か言ってください。

ポストモダンと身体性

(北川)最初のポストモダン、ポストモダニズム的なものと地政学の折り合いが悪いということから始めます。ポストモダニズムを、ある種の脱空間とか、ボーダーレスの議論として考える必要性はまったくないと思います。認識論レベルに過度に偏ったポストモダンもあるのですが、ぼくはもっと実存的、物質的なところで考えていますし、そのようなものとして理解すべきです。現実世界では、グローバリゼーションの下で、フラット化やボーダーレスではなく、ボーダーが国境に限らず、空間・時間の様々な領域で増殖してきたというのが実態です。これはまさにボーダースタディーズの議論ですよ。バイオポリティカルなボーダーを含めて、移民・難民の移動、人の移動への管理が国境の内外で増殖し、それによって従来の領土や国境が再編プロセスにある。コロナウイルスの文脈からもますます進展するこうした現実を考えると、認識論レベルでニヒリスティックになっているような状況は何もないと思います。

なので、結局いろいろあるけどやはり国家だね、という話になりがちかと思うのですが、実態というか、現実はますますそう単純ではないものになっていると考えます。境界が増殖し多数化するならば、様々な場所で増えていくに違いない争いや異議申し立てに切り込んでいくのが、批判地政学などの研究に求められるのではないのでしょうか。地政学なら、「国民」というか大衆は、あくまでも国家に統治される、なんならそこに一体化した受動的な存在として所与にされますが、批判地政学もそれに近かった。なので、これは批判地政学がもっと取り組むべきことなのだと思います。認識論にとどまらない現実の物質的な亀裂をとらえること、さらにはそうすることのみ、単純に国家をはじめとするような権威や主権に回収されない人の営みを紡いでいく根気のいる作業がありうるのだと思います。

とはいえ、今のお話はよくわかります。ナショナリズム、人種主義、男性中心主義といった、マッチョな世界のなかでこういうクラシカルな地政学が流行るわけです。こうしたマッチョさは、現実に対する無力感、現実変革への無力感の裏返しでもあるかもしれませ

ん。それでもやはり、堅いことを言うなら、実際に国家にとどまらない諸境界が増えて、さまざまなスケールを横断してこれらが存在しているのだから、それを見極めた選択肢を現実レベルでつくらなければならないわけです。国家に頼っても、国家に回収されても、現在の世界への解決策がそこにあるわけではありません。国家に回収されれば楽です。でもそれはこのひどい現実に対する態度としては物足りないのではないのでしょうか。

あと国家が不要か必要かはひとまず別にしても、ここで少なくとも言えるのは、別の選択肢、生活のかたち、国家から自律した人と人の社会的なかわりが、さまざまにもっと提示されるべきだということです。事典に即せば、「オルタナティブ地政学」（事典、424頁）が一番クリアですかね。ただ個人的には、こうした議論の流れは、たとえば反グローバリゼーション運動との関係でも考えられると思います。2章に出てくる対抗サミット、6章のグローバル・アナキズムなどの展開と関わるでしょう。今だけではなく、ここ最近に限っても、こうした1990年代、2000年代からの流れもおさえたいと思います。そういう意味では、選択肢の提示、つまり、国家に回収されないような選択肢を第6章でもっと出したかったという思いはありますが、なかなかみんなが納得する形で見せるのは難しかったというのが正直な感想です。

なので岩下さんの問いかけに戻れば、身体性の議論を入れなければならないというのはその通りです。身体を無化するクラシックな地政学のみならず、当初の批判地政学にも、こうした指摘が批判的になされました。フェミニスト地政学の項目などで書かれていますかね。絶対的な出発点として、身体、ジェンダー化され人種化された身体、あるいは主体形成、さらには欲望のレベルから地政学的なもの、またグローバル世界を考えるということです。軍事的なものはクラシックな地政学だから、批判地政学は扱わないのではなく、軍事や暴力としてあっさり了解されるものを支え、生み出すジェンダーやセクシュアリティの不均等な構造をあぶり出すことを目指すと言えるでしょう。軍事が実は広い領域に及ぶものであり、それゆえ脱軍事化もそのような課題として設定されるわけです。ただ暴力に対抗するのにもマッチョ化してしまう動きがあるのは、確かに悩ましいところなのです。地政学や国家についての問題の根源的なところかと思っています。



(山崎)「反地政学 anti-geopolitics」(事典、424頁)への誘惑の問題ですね。「反地政学」の項目は設定し、その執筆を提唱者であったポール・ラートリッジに依頼したのですが、「オルタナティブ地政学 alter-geopolitics」(事典、424頁)と改題されて返ってきました。これは「フェミニスト地政学」を執筆したサラ・クープマンの造語ですが、ラートリッジが唱えていた反地政学は、暴力をある程度想定したものだだったので。非暴力を含意するオルタナティブ alter- に変えたのかもしれませんが。

(北川)マッチョな国家、マッチョな地政学に回収されないという点で、フェミニスト思想は極めてラディカルなものです。脱国家的、脱地政学的とすら言えるでしょう。ただ地政学とか国際政治の文脈では、これはやはり難問でもある。例えば外交交渉でも、近隣国に交渉へ行って政治家が自分の国に帰ってきたら、成果があったとか、負けてないとか、そういうことを国民は求めるわけですね。その成果の内実とは無関係に。負けたり妥協したりすると、そんな政治家はいらない、代表として失格だとなる。マスメディアのみならず、普通の人も国家の目線、強くあるべき国家の目線で語り、それこそ SNS でも発信する。当人の生活感がない目線というか、感じられない目線というか。こんな感じで、ある種の男性的主体が日々つくられるわけです。こうした感情の部分はどう乗り越えるか。成果の内実を吟味して大した成果じゃないよということも大事ですが、もっと大事なのは、まさにそうした国家のゲームに乗らないような主体性や欲望のありようをつくりだすようなことかなと思います。これが重要なのは、反政府でも反国家的態度であっても、マッチョなもの、組織、集団であることが多かったというのがありますね。国家の模倣というか。

国家のマッチョな暴力が介入してきたら、どうするのか。逃げるというのも一つの手でしょう。正面からぶつからない。きわめて政治的な行動だと思いますよ。「弱者」がとってきた行動です。もちろんやり返す動きとか、自己防衛の動きが人々の間から出てくることもある。反植民地主義の闘争はまさにそうです。不平等な暴力的支配の現実なわけですから、言葉では表せない断片的な暴力の表現、集団的な暴力の表現や闘争があるんですよ。ただ、今では単純な武器や軍事力なら差がありすぎるケースが多いと思うので、正面切つてぶつかるのは困難でしょう。力関係が不均等すぎますから。個人的になかなかこうした闘いを想像できないのもあるかもしれません。なので、より非対称な方法というか、対峙する国家や軍隊とかとの緊張関係のなかで、知恵や工夫を通して、大小様々な自律的空間、助け合いというか相互扶助的なテリトリーをいかにして保持、獲得、守るかというのがひとつの鍵とは思いますが。事典で言えば、サパティスタの話(事典、702頁)ですね。スケールとしてはもっとミクロにも考えてもいいと思います。そのときに、暴力か非暴力か、という線を第一に引かないことですね。そうした問いは、こうした緊張関係のなかで

こそ意味をもつものでしょうし、そこですばっと二分割できるものかわかりませんから。政治的に突き詰めるなら、第一に考えるべきは関係です。露骨な正面のぶつかりあいにはならず、自分たちのテリトリーを強化できる、自分たちを有利にできる力を求めることとでも言えるでしょうか。ここにおいて、非暴力直接行動や身体は重要な政治的意味を各地で担ってきたのだと思います。モラルじゃなくてこうした政治的関係のなかにある変革の話として、非暴力は批判地政学でももっと突き詰め、論じられるべきだと思います。

(岩下)でもそうなら、なんでマハトマの非暴力論の項目がないのですかね。クリティカルとかフェミニストといわなくても、ガンジーは非暴力やってたじゃないのって。それに構造的暴力論や平和学の基礎的な項目がないのも気になってきました。ちょっと先端を追いすぎでは。

(山崎)一応、批判地政学はそういう議論を踏まえているという前提で整理しています。地理学者なので空間から議論します。「心の平和」みたいな議論になると心理学的、哲学的な問いにも踏み込まなければならなくなりますね。ただ「平和の地理学」(事典、396頁)というものは議論できると思います。

事典で描けなかったもの

(岩下)さていろいろ考えていくと、なんだって地政学になるのかなと思ったりします。例えば、脱ネットワーク地政学とか、反ネットワーク地政学とか、LGBTの地政学とか、解放の地政学とか、横からの地政学とか。横からの地政学というのは意味があるかもしれませんが。ソ連研究でいう「上からの革命」という議論で、普通、革命は下からだけど、ロシアでは上からだからと。日本の戦後は「横からの革命」だと政治学者が議論します。自分たちは民主主義の条件がなかったのにGHQが持ってきたと。「横からの革命」と日本国憲法先行論。革命か、改革かという言葉の使い方はさておいて。ちょっと古臭いですが、憲法が日本の社会の先をいっていたから、革新が「護憲」で保守が「改憲」という逆説が生じるとか。なるほどと思いましたね。

メタファーをきかせれば、地下の地政学とか、30度、60度、45度、垂直と水平でもないような、35度の地政学とか、緯度経度の地政学とか。シーパワー、ランドパワーに対抗するなら、アイランズ地政学とか。これもちょっと事典に出ていますけど、半島の地政学とか、島国、列島の地政学とか。キッズ地政学なんていうのもありそう。当たり前だけど、人間の地政学、田舎の地政学とか、神の地政学。

神の地政学なんて、キリスト教と他の宗教のせめぎあいだけでなく、キリスト教内の宗派のせめぎあいと空間形成の問題。結構、ヨーロッパの議論をするときには大事ですね。

いろいろ言いましたが、地政学って遊べるわけです。それを事典から学びました。だからSF（思弁的なフィクション）でもあると冒頭で言ったのですが、一つ問題があると思うのは、やっぱり頭でっかちです。話をとにかく大風呂敷にして、何でもそれで説明しようとする傾向がとてとても強い。

歴史研究の流れをみると、大文字の歴史学、大きな物語ではない、小さい幾つもの物語を見るという歴史研究が人気ですよね。そういう意味で地政学は、実証地政学と言うと何か形容矛盾ですが、スケール性の問題はやはりポイントかなと思います。もっとスケールを綿密に組み立てた議論が必要でしょう。ボーダースタディーズにその事例がある。事典でもあるボーダーの「透過性」ですが、これは国と国の関係だけではなく、サブリージョンとしてみたら分析が深まります。インドとパキスタンをみてもカシミールは「要塞」で透過性がないけど、ラホールとアムリットサルは第三人に開かれるし、物流もある。透過性が高いのですね。このようなきめ細かい議論をすると国際関係でも見え方が違ってくる。このアプローチは国家中心ではないともいえるし、他方でネオクリティカルな地政学的でもあり、そこから生まれる地政学的な見方はクリティカルでもありそうです。

(山崎) マルチスケールの問題ですが、感染症のことに触れないわけにはいきません。新型コロナについてはさすがに事典では触れられなかったけど、最初の「おびえ」の章で感染症をとりあげていたのは正解でした。さて感染が広がった当初の段階では、ワクチンがないので非製薬的介入という方法(多様なスケールでの行動制御)がとられます。その一つが水際対策ですが、コロナはそれでは防げませんでした。SARSのときは水際で成功したのですが、新型インフルにこれがあまり効かず、今回、完全にだめになった。日本でいえば、コロナ対策は特措法をつくって知事に権限を与えて都道府県ベースで行動制御をやらうとしました。

(香川) 『翔んで埼玉』という映画を思い出します(笑)。県境がいきなり、国境のようになる。先見の明がありました。

(山崎) でもこういうとき、より広域的でかつ国内でやれるとしたら、これしかないようにも思います。国が全部やることはできないし。

(高木) そういう意味でいうと、ちょっと話がそれますが、道州制というのはなぜ途中で消えたのでしょうか。麻生内閣で国会に法案を出したのに、その後の政権交代で立ち消えてしまった。道州制があればもうすこしうまく機能したかもしれませんが。

(古川)これは地政学とは必ずしも関係ないかもしれませんが、道州制が進まないのは、どういう道州をつくるかという設計が進まないからです。都道府県はもっと権限が欲しいですが、国は移譲せず、出先機関をそのまま道州にしたい……そういうせめぎ合いで立ち消えになってしまったというのが事実でしょう。名古屋でも中京都構想がありましたが、権限の取り合いが多くを占めていました。大阪は最終的に住民投票までいきましたが、他のところはとりあえずこのままでいいだろうと。要は事務権限だけもらっても財源がもらえなかったら意味がないということです。結局、権限と財源……お金がかかるだけの権限はいらぬ、都道府県はそういう姿勢で、国が渡そうとする権限も自分たち(国)がいらぬものばかり、加えて都道府県が希望する財源は移譲しないのだから立ち消えになるのも当然です。空間や境界の問題を議論するときも、このような財源と権限に関わる議論抜きでは説得力に欠けます。

道州制になって何が変わるのか。住んでいる人たちにどういうメリットがあるのか。そのあたりからの議論の積み上げが必要でしょう。これに関連して事典の話をしますと、国家ではないところを言うならば、地方政治などもスケール論のなかでもっと議論してもよかったのではないのでしょうか。クリティカルな地政学はいいのですが、これもネオクラシックで大事な部分かと思います。人吉の被災のときに、熊本県内しかボランティアを入れないという話をきいて、宮崎や鹿児島との県境なのにすぐ近くの人たちが支援に行けないという話などまさに「新しい地政学」で論じてほしいところです。

私も国際関係論の研究者なので、自戒を込めて言えば、どうしても国家から入ってしまうのですが、簡単に国家ではないと言わず、国家に関わっているけれどもそれとは異なるスケールで実務を担っている分野の人たちの意見を取り込んでいくべきではないでしょうか。

(山崎)アーバン・ジオポリティクスという、「都市の地政学」は事典にも入っています(事典、454頁)。ようやく最近、取り上げられるようになった。ただこれは地政学ではなく、まさに地政治だと思います。都市における地政治です。

(古川)そうですね。また、事典に入っている宇宙とサイバーも大事です(事典、14-19頁、542頁)。そして新型コロナも安全保障の問題と言えます。だから、やはりクラシックな地政学でもありうるし、逆に古いイシューでもなんでも「新しい地政学」のなかで意味づけることもできるのではないのでしょうか。つまり、意外と古典とクリティカルというのは対立的ではなく、補完的であったり、重層的であったりするのではないのでしょうか。あまりクラシックを目の敵にしなくてもいいように考えますが、同時にこれまでなら安全保障や国家中心だったイシュー……とくにサイバーや宇宙に関する問題の枠組は、グロー

バルスタディーズ、あるいはグローバルスペース論ということになるのではないのでしょうか。その意味で、地政学だけでなく、国際関係論も「新しい」という意味合いをもう少し真剣に受け止めるべきでしょうね。

(香川)今までの議論を踏まえると、いろいろな地政学があるという話の中で、キッズ地政学というのは今後ありかなと感じました。漫画や絵本の地政学もありますし、『14歳からの地政学』といったタイトルの本も出ています。これは地理教育の観点からも考えるべきことです。事典はそういう射程もありますね。

環境に関していえば、正直、もう少しいろいろな分野の方にお声掛けしたかったです。もっと政治的なものも入れられたはずでした。例えば、喜多川進『環境政策史論』勁草書房(2015年)によると、ドイツの環境政策、ドイツがなぜ容器包装リサイクルをするのかという話など面白く、これはバイエルンの地ビールのおかげであり、地ビール業者のシェアの確保がきっかけだったそうです。要は、全国的に事業展開をするビール会社は缶が多いので、ボトルで売っている地ビール会社がロビイングをして保守政治家を使って容器包装リサイクルを進めるよう働きかけ、それで政府が動いたそうです。先ほどの古川さんの話のお金と権限に通じるものがありますが、こういうのも地政学、いや地政治でしたか、としていけるのではないのでしょうか。地理学と政治学との接点が増えるともっと議論は活発になると確信します。

地政治の創造にむけて

(山崎)今の話を聞いて思うのですが、事典というのは作ってみてわかることもあるということですね。こういうやり方はあまりないのかもしれないけど、本当に新しいものをつくるためには必要なステップのように考えます。

(川久保)この座談会は今後の展開を考えるのにとっても刺激的です。地理と政治の関係ですが、政治地理学者は権力と空間の関係を考えるじゃないですか。常に空間がある。でも政治学者は空間を必ずしも考えないのです。実生活においては空間を伴うことがほとんどでしょうが、権力現象自体は、空間を捨象してもありえます。その見立ての違いが、皆さんは何でも地政学にしたがるけど、私たちは何とかイズムなどという発想は二項対立であり、そこに権力が生まれると考えるから、抽象的に行けるのですね。

政治学では、権力とは相手を従わせる力という定義から始まっていくから、ネットワークと権力関係を思考していくプロセスには普通、空間はいりません。空間を考えると、権力関係が現実の場でどう表現されるかという次の段階です。言い換えれば、原理論的なところで空間を考えないのです。

(山崎)そこは地理学の中でも突き詰めている人は少ないでしょう。地域のことをやれば地理学だという人がかなり多い。では政治学と対話をするときには、権力をどう考えるかという話になるのですが、地政学と言った時点で「地」という言葉、つまり地理的なもの、空間的なものに執着が強いのですね。当然、権力はある種の空間的な実践として認識されなければならないという前提がある。だから地理学者がもてはやされる場ではいいのですが、国際政治のプロパーと切り結ぶとき齟齬が生まれる。国際政治の人から、空間の前に権力を考えるよと言われても、それを切り離して考えられない。逆に、国際政治学者にとっては、空間と権力の関係性をそこまで考えたことがないから新鮮に映るのでしょうかね。

(岩下)そこに欧米だと価値論が入りますから、地理とか空間にすべてを入れ込むことに対する抵抗をする人たちが生まれます。私の国境論で外交を読むなんていう話は、ある一部の米国人は嫌います。ここには民主主義とか、人権とか価値論がないから。イデオロギーも宗教もない。これらは全部、どこかで空間と絡むはずなのだけど、少なくともそちらへの意識がまわらないから、決定論だと言われて反発される(笑)。

(高木)ただ、先ほどの権力の話に戻すと、やはり権力というのは人と人との関係です。しかし、人というのはどこかに住んでいるわけで、土地や場所を伴う。

(山崎)地理学はそう考えると。

(高木)土地の問題、つまり空間と結び付くのです。

(岩下)政治学者はそこを分からないんだよ。それは後だから。なぜかという、土地をイメージした瞬間に、普遍性がなくなるからね。

(高木)でも例えば、憲法は、人、つまり国民を守るものでしょう。だから選挙の定数不均衡が生まれると、これは国民の価値が平等ではないとなる。その結果、参議院選挙の合区のように、県境を超えて選挙区を設定し直したりする。つまり、人と人との関係、一票の格差を守るために面積を変える、県境を切ったり、貼ったり。権力というのは人と人との関係かもしれないけど、必ず空間やスケールを伴うのです。

(岩下)でも私たちから言わせれば、憲法と言わなくて国家法とする国もあるから、一票の重みなんて議論はある種のフィクションであり、どれほどのものかという反論もあると思う。

(山崎)そういう議論も踏まえた上で、やはり空間論を考えたいと思うのです。国際政治がいう地政学は空間というよりは、やはり一つのフィクションを地理的に見立てているだけ。

(川久保)政治学、国際政治と、地理学との対話がこれまで本当になかった。でも政治学や国際政治学をやっている私たちがボーダースタディーズを提唱したのはやはり地理学の影響ですから。ネオクラシックに地政学をいう政治学者たちも空間と言うのだけど、これがまた抽象的ですからねえ。ただ、言説批判に関しては政治学と地理学は共通点もありますね。

(高木)それはそうだと思う。言説分析の出自は両方から出てきてますから。

(北川)空間というときに、抽象化されたものだけではなく、人の息吹、暮らしがあるところからとらえていきたいとは思いますがね。地理学なら、そういう部分を見据える方向にいくでしょうか。何とかイズムと価値論の話をするときも、地理学では確かに、それぞれの場所、地域、人々が住んでいるエリアでこれがどう現出しているかを最初に考えます。普遍的なもの個別的なものの関係を地理学としてどう考えるかだと思うのですが、いま翻訳をしている本の中で、レーニンの革命の議論が出てきます。レーニンは自分のコミニズムの理論、実践がロシアという独自の文脈に根付いたものであるということを理解しています。コミニズムのまるで教科書のように外国人がロシアに学びに来て、結局はロシアの文脈に根付いているコミニズム論なので、それをそのまま伝えられないし、容易には理解されない。ロシア革命の形態をそのまま外国に適用することはできないと言っています。そこで翻訳という実践が重要になります。だから価値やイズムにしても、こんなふうに別の地理的、社会的、政治的文脈へと翻訳されないという意味をなさない。そういう地理的な翻訳のプロセス、そういう動態を観たいと思います。

(山崎)ただこういう議論を踏まえ、地政学の先をどう考えるのかというとき、平和構築のための実践といったものが、いまの地理学のなかでありうるのかという議論ができていないのです。批判はたくさんした、でもそこから先、地理学という学問を通してどうやって平和を構築するのかという議論は始まったばかりですから。地理学的な実践とは何かというのは重い課題です。

(岩下)最初の議論に戻りますが、ここではやはり地政治をもっと打ち出した方がいいのではないですか。私は最近、ロシア・東欧学会というところでロシアの対外政策を報告した

のですが、地政治や「地政コード」を手掛かりに分析しました。そのペーパー（「ロシア外交・試論：地政治・アイデンティティ・パワー」）は学会誌の方で読んでいただくとして、ポイントは誰もが地政治という言葉が初耳で、クリティカルな地政学を通じた空間認識の可変性をもとにした分析には驚きのようでした。そのくらい誰もが地政学の議論を知らないのです。まあ、私も事典づくりに参加するまでは似たようなものでしたが。

(山崎) そう、ジオポリティクスは、そういう空間とか場所をめぐる政治的实践としてとらえ直すべきだと。そして、その実践をみるのが研究です。「学」をつけて、古典地政学に引きずられるのではなく、いろいろな主体が様々な土地とか空間の管理をやっており、そのどれを見通すかがポイントです。国境もそのように見たらいいのです。端っこに行ってきたから、向こうが気になる、対岸との関係はどうだったかが見えてくるといったアプローチでしょうか。地理学はそこをもっと深める必要があります。環境決定論ではなく、地政学を地理に引き戻さなければなりません。地理的な地形とか、島の配置とか、国境はどこに引かれているかとか、そこにどんな人が住んでいるか、どういう経済があるかがそれ。本気で地理を地政学の中に入れ込まなあかん。

(岩下) 身体性やな。

(山崎) そう。身体性に近づくまで、地理を戻していかなきゃいけない。今、地理は権力に「略奪」されて、童話的な神話に落とし込まれています。そんな簡単とちゃう。違う、違う、と。現実はずっと複雑で。

(岩下) やはりマッキンダーのユーラシアの欠如みたいな、地図のメルカトル、ユーラシア大陸を正面にしたメルカトルの罫に戻りますね。右手にアメリカがあつて、左手にヨーロッパがあるわけじゃないですか。ユーラシアを中心に置くこと自体が童話の始まりです。そしてそのユーラシアの抽象性。いろんな宗教があり、民族が暮らし、多様なユーラシアを知ることができれば、あんな単純な議論はできません。そういう思考をする限り、この地政学にのっかっていく限り、身体性を欠いた、空想科学に戻ります。それを批判する地政学も違う意味での空想なので、もう一つ何か欲しい。

(山崎) 環境が重要なのは、国家中心主義の克服や身体性の回復、権力に取り込まれない生活、そういったものを見ることが出来るからだと思います。この事典の強みはそこだと思います。

編集に参加して：今後の方向性

(川久保) 私は途中から携わらせていただいたのですが、ボーダーの問題が『現代地政学事典』の中で明示的に取り上げられたのは、大きな意義があると思います。境界研究というのは日本ではまだ新興の学問領域ですから、認知度を上げる上でも、事典の中に「ゆらぐボーダーへの再接近」(第5章)という形で入れていただいたことに感謝します。

なぜ、今なぜ地政学かについては、『現代思想』にも私も「ボーダースタディーズの生成と展開」というところで書かせていただきましたが、時代状況もあるでしょう。危機の状況と日本を取り巻く情勢がそれです。

また国境を越えるというリスクが拡散している状況のもと、変な危機意識をおおる論調が盛んになっています。地政学が戦争のツールとして復活するのか、例えば、2014年の『フォーリン・アフェアーズ』の中に“Return of Geopolitics”という論文がありますが、「復活」よりは「回帰」なのかなと。この時代状況の中で、あえてこの事典が地政学の広がり、方法論、マルチスケールをあげ、領土や国家にだけに立脚しない方法論的な視点を打ち出し、様々なアクターで論じたことで、地政学の変貌を社会に訴えたことはインパクトが大きいと思います。

ただ実情を言えば、一般の人や私の同僚から、平和研究も教えている川久保が何で地政学なんてやるのと言われるのです。一般の人のイメージで地政学は軍事研究であり、領土の拡張とか、資源の確保とか、人口の再配分などです。そういうものを少しでも変えられたとしたら願ったりかなったりです。

(高木) 私もまったく同感で、『現代地政学』という形で事典が出たということのインパクトは大きい。ほぼ同時進行で戦略論的な『地政学原論』という本が一方では出て、それからもう一方では、国際政治の人たちが中心になった『新しい地政学』というのが出た。この二冊ともやはり伝統的な地政学観から抜けきってないのは、やっぱり国家中心の外交政策を中心に考えている。『原論』の方は軍事戦略論に特化していて、考え方自体は伝統的な地政学の考え方から抜けきってないと思うんですね。

それに対して私たちが出したこの『現代地政学事典』というのは、国家単位だけでなくネットワークの問題も扱っているし、それから環境問題も扱っている。国民の間に、ちまたに流布しているいわゆる地政学からは外れるイメージのトピックスが結構多いと思うんですよ。伝統的な地政学観を是正するという意味では、この事典を担当したことの意義は非常に大きいと思います。これは童話ではなく、れっきとした資料にもなる事典ですから、持つ意味は大きいと思うんです。ところが現実の地政学の普及という点では、むしろ『新しい地政学』が売れているでしょう。価格も安いし。

だから昔のままの地政学のイメージが再生産されてしまう。何とかそのギャップを取り

除きたいなというのは私の思いとしてあります。ただ、それをあえて地政学と言うかどうか、私は政治地理学で十分だと思う、個人的にはね。私は地政学というのは政治地理学の一部だというふうに考えていますので、そういう意味では政治地理学をもっと活性化する必要があるとは思いますが、その点ではちょっと忸怩たるところはありますね。

せつかくこういった本が刊行されても、現実の地政学の普及状況を考えると、このギャップというのは、おそらくなかなか埋まらないだろうなという気がします。

(岩下) 今後はどうするんですか、「論壇地政学」(事典、408頁)と闘い続けるということでもよろしいんですか。

(高木) 「論壇地政学」と闘うつもりはないです。私にとって、「論壇地政学」はイメージとして、この『新しい地政学』のグループと重なります。むしろ『地政学原論』のグループは「大衆地政学」「ポップ地政学」ですかね。今後はこういう「論壇地政学」のグループと政府との連携で、国策がつけられていくのかなという予感があります。

(古川) この企画に参加させていただいてありがとうございました。地政学は確かに皆様のおっしゃるように、ステレオタイプな側面もありましたが、今日の話にも出てきたように、ジオポリティクスを深く考える機会も与えていただいたということに感謝申し上げます。ただ、本書刊行後に新型コロナウイルスの感染が広がり、20年ぐらい前まではSFの世界と位置付けられていたサイバー攻撃や宇宙なども国際関係論、あるいは最新の防衛大綱でも取り上げられていることに象徴されるように、世の中の変化は早く、空間の捉え方もこれからどんどんまた変わっていくのでしょうか。それを追いかけていく作業は大変ですが、また何か新たな企画がありましたら参加したいです。

(岩下) 北川さん、記憶に間違いがなければ、当初、この企画への参加を躊躇されてましたよね。でも北川さんが編集会議で暴れられたというか、活躍されたおかげで面白いものになったと思うのですが、いかがでしょうか。

(北川) 最初、高木先生に誘われ、ちょっと返事を躊躇していましたが、あるとき、やる気になっていました。最初はちょっと堅苦しい考え方だったかなという反省もあります。つまり、地政学と言ったとき、いわゆる論壇的なもの以外が日本のなかで見当たらない状況で、いきなり事典を作るというのが、何か本末転倒だという印象をもったわけです。今日議論したような地-政治をめぐる様々な研究がそれなりにあるのが先で、手順が逆ではないかなと。いろいろな研究があるから事典ができるし、それが研究者にも渡るのが普通か

と。なんなら事典よりは本が先だろうと。

ただ、地政学というものを、地政治としてそこから広くとらえ直せば、地政治的研究にかかわる分野や研究は、そう自覚されていなくとも、ある程度はあるでしょうし、それらを丁寧に網羅していけば事典になるということがよくわかりました。ご自身の研究が地政治とか、もっと言えば、批判地政学だと自覚していない研究者の方々を巻き込ませていただいたわけですが、それはとても良かったと思います。事典ならではですかね。無理矢理とかじゃなくて、ほんとうにそれぞれが批判地政学のいろんな系譜、いろんな研究や問題意識にそっていたり、近かったりで。

(岩下)ありがとうございます。私も忘れていた点ですが、この事典を作るときに新しい分野を私たちで作るんだというような心意気でやるしかないと感じたのを思い出しました。今までの事典とはまったく作り方が違うんだということを丸善の方とお話ししました。そういう意味ではこういうユニークな事典づくりを支援してくださった丸善の小林秀一郎さんと大江明さんにはお礼の言葉もありません。

(高木)さきほど言い忘れたことです。今の高等教育、大学の学問の流れというのは、文理融合に象徴されるように脱ディシプリンです。ディシプリン中心ではなくて、ディシプリンとディシプリンをつなぐインターなものが増えているように思います。横と縦の話でいえば、そういう意味では地政学と呼ぶのか地政治と呼ぶのか、そこは分からないけれども、この事典で扱った項目を束ねるようなアプローチの仕方とか、あるいは境界研究(ボーダースタディーズ)のようなアプローチの仕方というのは、既存のディシプリンをつなぐ紐帯として重要な役割を果たすのではないのでしょうか。今後、地政治にしても、ボーダースタディーズにしても、発展の可能性を強く確信しました。ちょっと自画自賛ですが。

(山崎)私はどちらかと言えば、国際政治との向き合い方を意識しました。国際政治をやる人が国家中心主義から抜けられないことを前提にして事典の構成を考えました。分析のスケールが固定されている分野と違い、地理学のそれはもっと自由なので切り結ぶことができなと思います。ただ地理学のスケールについての発想も柔軟ではなくなっているようで、新型コロナ問題を考えるときなど十分にその力を発揮できてないような問題も散見されます。地政学を考えることで、そういう地理学への示唆もありました。

(岩下)丸善から再版になるときは二頁ほど確保いただけるそうです。ぜひ高木さん、山崎さん、川久保さん、古川さんあたりで知恵を絞って、今回の議論を踏まえたこの事典の

読み方などをインストラクションしてください。これは「読むための事典」なので読み方のガイドラインがあるともっと地政治への道が開けるように思います。今日は、長時間にわたりありがとうございました。また議論しましょう。